

## 第3章 インタビュー調査

### 1. グループインタビュー調査

#### (1) 調査の概要

##### ① 調査の目的

第2章のアンケート調査の結果で明らかになった仮説の質的検証、すなわち、80歳代の高齢者が生きがいの持続的促進を図り、社会的対応をするための5K（健康、経済、心〈生きがい〉、家族、交流）を基本しながらも、激動する政治・経済・社会の動向に対する関心の有無、また、自身の身上監護や家族など関係者との間における財産管理など“終活”に関わる意見を聞くため、ナルクの各支部の運営に関わっている80歳代の会員を対象にグループインタビューを実施した。

##### ② 調査対象者

ナルクの会長の高畑氏<sup>1)</sup>をはじめ、関東地区のナルクの支部で中心的な役割を担っている80歳代の役員など会員計12人。

なお、発言者はアルファベットとして表記し、自由に本音を語ってもらった。

##### ③ 調査項目

調査項目はアンケート調査の結果を踏まえ、健康、経済、心（生きがい）、家庭、交流の5Kのほか、社会性に関わる健康状態、経済状況、心理的状況、家庭環境、社会的交流、社会的関心、幸福感、ボランティア、趣味、政治、“終活”などを中心とした。

##### ④ 調査の実施時期

この調査は、平成28（2016）年1月12日に実施した。



(ナルク東京事務所にて：中央の2人は川村と高畑氏；石川撮影)

<sup>1)</sup> この報告書では学术论文の著者を引用する際にならって敬称を付さず、インタビュー調査の対象者などには敬称として氏を用いている。

## (2) 調査の結果

質問項目	インタビューの結果
健康	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少し難しい病気を患っていて2か月に1回通院して薬をもらっているが、「日本経済新聞」を読みに行くため、近くの図書館まで毎日、大体歩いて出かけている。雨が降ったときも行く (G)。</li> <li>・ 東京都心に必ず月1回は出て、美術展示会、あるいはSホールなどの音楽会、コンサートを聴きに行っている (G)。</li> <li>・ 毎食ヨーグルトを食べ、また、ビタミンCを毎食1gずつ摂っているなど、食事バランスに気を付けている (E)。</li> <li>・ 本当は運動した方がいいと思うが、運動しなくても年中、あちこちに行ってボランティア活動していれば自然と足腰も鍛えられる (E)。</li> <li>・ ナルクで「歩こう会」などのツアーを組むと参加者が結構多く喜んでもらっている (A)。</li> <li>・ 定期健診とか人間ドックとかを定期的に受けるなど早期診断、早期発見が一番だという意識を強く持っており、それが健康長生きの一つの秘訣 (I)。</li> </ul>
経済	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ナルクで中心的な役割を担っている人は大企業、有名企業出身が多く、経済的に安定しているため、こういうボランティア活動もできる、というところはある。今、ここにいるメンバーは年金を月30万円以上はもらっている (B)。</li> <li>・ 団塊の世代が定年を迎えても年金がすぐ支払われなくなったせいで、60歳のナルク会員を集めるのが難しくなった。やむなく元の会社に雇ってもらって再雇用の形で何らかの給料が出て、仕事はろくな仕事をもらえなかったけれども我慢してやったという人も結構いる。こうなるとなかなかボランティアをやろうと思っていても「できないな」というようになる (I)。</li> <li>・ 最近の60歳代ぐらいに声かけ、ボランティア活動に誘っても、「働くことが先だ」ということになる。ボランティア活動に参加しない理由は何かという、働かなきゃならないからだと思う (C)。</li> <li>・ われわれみたいな年金をある程度もらっている身分を60歳代ぐらいから見ると、裕福に見られてしまう。「〇〇さんなんてね、雇用保険もらって年金もらっているじゃないか」と。「そんなことはわれわれは考えられん」となる (C)。</li> <li>・ 団塊の世代、あるいは定年前の人はお金を持ってなくて、家を持っているケースが多い。ただ、ローンがわれわれの時代と違って40年ローンとかで、定年が終わってもまだ続いていることがある。奥さんから65歳になったって五体満足だったら働きなさいというふうにお尻を叩かれている、というようなこともあるように思う (F)。</li> <li>・ 社会保障がしっかりしていて、ある程度経済的にゆとりがないと本格的にボランティア活動はできないと思う (A)。</li> </ul>

質問項目	インタビューの結果
心 (生きがい)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世間では80歳代というと、「無理しないで、のんびりやっぺいこう。あまり年寄りがやる仕事もないな」といった感じになっていると思う。これは80歳代の方々が気力をなくしているからである。気力をしっかり持ってもらって人生の目標を持っていただくということが大事だと思う (I)。</li> </ul>
家族	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会社を退職した後は家内がナルクのボランティア活動に全然関心を持ってくれなかった。2年前にナルクのボランティア活動に初めて一緒に参加して、ナルクのメンバーにボランティア活動内容を非常に丁寧に説明してもらい、それからナルクの活動に目覚め、最近はこちらに出るようになった (B)。</li> <li>・夫婦で同じところではボランティア活動をしてないが、お互いに困っている人を助けるボランティア活動はしているため、共通の話題はある。現役のときは、「わしの仕事に文句いうな」といっていたけれども、今ではナルクや地域のボランティア活動について議論するようになった (I)。</li> </ul>
交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元気なうちに、何か少しでも人の役に立ちたいという思いは持ち続けていきたいなと思う。それが自分の生きがいになると思う (A)。</li> <li>・僕らの世代は経済的に恵まれている一面はあると思うが、ボランティアに「参加する」という気持ちが大事である。次の世代のことも気になるし、社会のことも気になる。そこで、何かで役に立ちたいというのがナルクのボランティア精神の基本だと思う (A)。</li> </ul>
社会的関心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナルクでは政治問題など、ちょっと意見に違いがあることについてボランティア活動すると内部分裂するからやらないようにしている。勉強会程度で対応していかないといけない。しかし、介護問題や年金問題、それから後期高齢者の問題などはナルクのメンバーで国会の前に座り込みもしたことがある (A)。</li> <li>・ボランティア活動は自分で進んでやっているわけですから、ナルクの会員は社会問題にも関心が高いと思う (A)。</li> </ul>
幸福感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で思っているのは失礼なのかも知れないけれども、私個人では幸せだと思っている。戦中、戦後にひもじい思いもしたが、旧制中学、高校、大学、会社勤めを含め、ずっと考えてみるとまあ幸せだった、運が良かったなと思う。今、達成感があるし、それぞれの時代に達成感もあったし、まあまあいいなと思う (G)。</li> </ul>

質問項目	インタビューの結果
ボランティア、趣味、政治、“終活”など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現役時代は会社のつながりがあったが、定年後にまた新たなボランティア活動だとか、地域の新たな人間関係、つながりができていて、会社時代とそれから定年後の地域のつながり、そういうなかでの交わりでできた人間関係に厚みが増してきたと思う (A)。</li> <li>・ 今まで会社時代は地域のことは女房任せだったが、定年後は地域のボランティアもやりながら自分の趣味の会に参加し、つながりができたことで人脈の幅が広がったと思う。それは長生きしてボランティア活動してきたプラスの面だろうと思う。今でも 500 枚ぐらい年賀状を交わっていて、それは大きな財産だと思っている (A)。</li> <li>・ 私は年賀状のやりとりを 1,000 枚ぐらいやっている。年齢を重ねるとともにだんだんに人脈に広がりが増えてきている (I)。</li> <li>・ 歳をとってくると何か役職が回ってきて担当することになる。経験を買われているのか、長老だからなのかわからないが・・・(F)。</li> <li>・ ナルクでボランティア活動してもう 20 年になるが、最初のころは庭木の剪定などして「ありがとう」といわれても、正直、何かやってやったという気分が半分あった。それが今は違い、やってやったとかいう気持ちが不思議と全然ない。人間的に丸くなり、自然にボランティアができるようになった (C)。</li> <li>・ 原発とか憲法「改正」とか最近の政治的な動向になぜ、声をあげなければいけないのかななどの意見もあるが、意見が分かれているため、取り組みにくい (H)。</li> <li>・ 最近、ナルクのサービスを受けたいため、入会してくる会員も少ないが、80 歳代ともなれば、いずれだれもがサービスの担い手から受け手に代わるため、遺言や相続、看取り、葬儀、墓守など“終活”という問題にも対峙する必要がある (H)。</li> </ul>

### (3) まとめ

定期的な運動や栄養バランス、定期健診の受診などに非常に気をつけている方が多かったが、ほとんどの方が何らかの病気を抱えており、複数の薬を常用している方も多かった。もっとも、健康状態が多少悪くても生活や地域活動への積極的な姿勢や気力があれば活動を継続することが可能ではないか、とも思われる。

一方で、現在の80歳代からみた60歳代の方々は経済的に厳しく、地域活動に参加しづらい、または参加する年齢が遅くなっているという意見があったことから、最低限の経済的なゆとりが地域活動への参加意欲を促進することがわかる。ただ、就労ができなくなり、年金が支給される年齢以降は経済状況にかかわらず地域活動へ参加される方も少なくないと考えられる。

また、夫婦で地域活動をしてお互いの共通の話題があったり、人の役に立ちたい、活動に参加したいという気持ちを強く持っている方も多く、これらが現在の達成感や幸福感の“土台”となっていることが考えられる。

最後に、地域活動をすることで人間関係に厚みが増したり、地域活動に関する役職を担当したり、ボランティア活動に慣れて人間的に丸くなったりするなど、意識的、無意識的にかかわらず80歳代になっても「レベルアップ」している点があることが散見された。とくに60歳代から地域活動を始めた男性は、仕事で得た知識や技能を活かしつつ地域活動への理解も深めながら活動を継続し、「円熟期」に入ることによって可能となる活動があると考えられる。このため、80歳代など後期高齢者の生きがいの持続的促進とその社会的対応を実現するには当該の地域社会が彼らの社会性をどのように活かしていくか、の工夫が求められる。

なお、原発とか憲法「改正」などの最近の政治的な問題は意見の相違があるため、取り扱いに苦慮しているが、介護や遺言、相続、看取り、葬儀、墓守などの“終活”の問題も今後の身近な問題として提起された。

## 2. 個別インタビュー調査

(中略)